

技術・情報名		部会名	野菜・花き(野菜)
実施機関名		三重県農業技術センター 園芸部	分類
			2

1. 技術・情報の内容

1) 技術・情報の内容及び特徴

地床栽培に対して約1.9 倍の株数が入る、シーソー型回転ベンチを開発し、単収は約1.5 倍で5年連用が可能なることを、今までに明らかにした。今回は、土にかえて綿状ロックウールを用いて、培土の軽量化を図り、育苗作業の省力化のために、ロックウール本ばへ直接子株を植えつける方法(以下、無仮植栽培とする)を検討した。なお、培養液管理は園試処方に基づき、頂花房着果までは1/2単位に、それ以後は1単位とする。

- (1) 無仮植は定植時の活着が良好であり、初期生育も順調である。
- (2) 無仮植は慣行よりも花芽分化が早く、開花も7日程度早まる。
- (3) 無仮植は初期収量が多く、その結果全体収量も多い。
- (4) ロックウールは2年程度の連用が可能である。

2) 技術・情報の適用効果

- (1) 採苗期以降は本ばの施設を利用するため、施設の効率化が図れる。
- (2) 育苗期も立作業のため、全作業行程のほとんどが、楽な姿勢となる。
- (3) ロックウールは植えたいみが少なく、花芽分化促進処理が容易である。

3) 普及・利用上の留意点

- (1) ロックウール表面のアオミドロの緑色がなくなれば、窒素中断はなされているので、これを目安とする。
- (2) 新葉にチップバーンが発生する時(特に出蕾前後)は、培養液濃度が高くなっている場合が多いので、洗浄のために水を流すか、濃度を少し低くして管理をする。
- (3) かけ流し方式の場合は、ハウス内が多湿となり易いので、ベンチの下は全面マルチとする。

2. 具体的データ(図表)

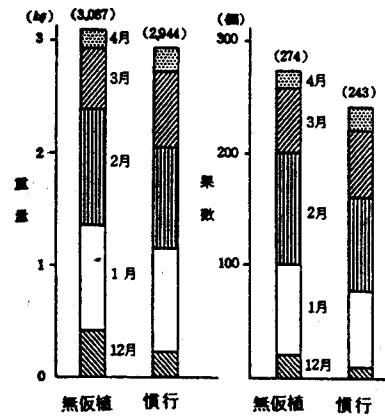


図1 月別収量(10株あたり5g以上可販果、女峰)

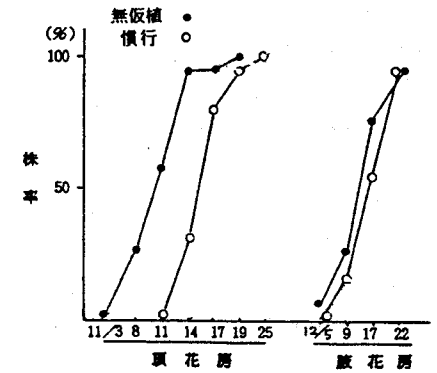


図2 開花状況

表1 生育量の推移

栽培法	葉枚	葉柄長	小葉長	小葉幅	冠径	花芽分化
無 月日	枚	cm	cm	cm	cm	
板 9/16	5.4	10.1	9.2	5.4	1.0	B <sub>2</sub>
板 10/18	5.7	7.2	7.9	4.9	—	
板 12/25	10.5	11.3	8.8	6.3	—	
植 3/14	8.5	7.2	5.8	3.8	—	
慣 9/16	4.3	10.7	10.1	6.3	1.0	A <sub>1</sub>
慣 10/18	5.2	6.2	7.1	4.7	—	
慣 12/25	10.6	9.9	9.9	6.7	—	
行 3/14	8.2	6.9	5.9	3.8	—	

注) A<sub>1</sub>: 分化初期 B<sub>2</sub>: 花房形成中期

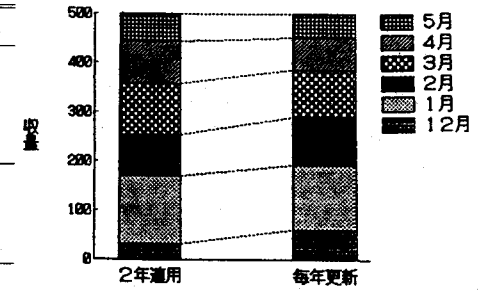


図3 更新年数と1株あたり収量

3. その他特記事項

研究課題名: イチゴベンチ栽培によるロックウール栽培の体系化

研究期間: 昭和61年~平成元年

予算区分: 県単

研究担当者名: 野菜研究室 庄下正昭(普及農産課 園芸部駐在専技)